仮説検証としての文法史研究

衣畑智秀（福岡大学）
tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

1　はじめに

文法の研究では、仮説を立ててそれをデータによって検証するというプロセスが一般的に認められる。たとえば、現代日本語のシテイルは動作動詞を取って、「進行」と「結果継続」を表す。

(1)　太郎は（その）本を読んでいる。

これは、われわれ日本語話者の直感という形で「観察」されるとしよう。それに対し、これはシテイルが「局面変化の後を取り出す」からだとすれば、それは直接観察できないので、「仮説」されたものだと言える。この仮説は、動作動詞（「読む」）が動作の「開始前から開始後」、「終了前から終了後」という2つの局面変化を持つという（補助）仮説（時に「想定」とも）と合わせることで、上の観察（「開始後」なら「進行」、「終了後」なら「結果継続」）を説明することができる。

仮説は「観察」をうまく説明するだけでなく、適切に定義されれば、他の想定と合わせることでさらなる現象を予測し、仮説を検証することができる。たとえば、変化動詞が1つの局面変化しか持たないとする（想定）と、シテイルに動作動詞のような曖昧性が生じないことを予測する。また、状態動詞に局面変化がないとする（想定）と、シテイルのような状態形にならないことが予測される。これらはそれぞれ(2) のように検証でき、仮説の妥当性を高めることができる。

(2)　a. 電気が点いている。
　　b.*机の上に本があっている。

仮説を立てることの重要性は、現象をうまく言い当てているように見せることではなく、より広範な現象を予測し、検証が可能になることである。予測が確証されればわれわれの言語に対する理解は深まる（と感じる）し、たとえ反証されてもよりよい仮説を立てようとすることで学問は進歩する。このようなプロセスは文法の研究である以上、古典日本語でも歴史変化でも変わらない。

2　歴史的研究は特別か？

日本語の歴史的研究には「理論的反省を経験することが少なく、ひたすら「実態」の研究を積み上げて来た」（山口 2011: 530-1）や「文献資料に見いだされた事実を指摘しただけであり、その事実を日本語史の中に位置づけようとしていない」（小松 1999: 4）といった批判的反省がなされることがある。一方で、日本語の歴史を有機的な体系のもとに捉えようという考えも古くからあり、たとえば阪倉 (1975: 3章5節) では語彙体系、文法体系、音韻体系の変遷の動機として「心情的な連帯感によってむすばれていた、閉じられた社会から、さらに開かれた社会へと、コミュニケーションの場が拡大する」（p. 291）ことを挙げ、その結果として文体の変化、係り結びの衰退、二段活用の一段化、上代特殊仮名遣の喪失やア・ハ・ワ行の合流に触れている。

しかし、一つの要因が、語彙・文法・音韻・文体の変化を引き起こすという仮説はまず検証不可能である。実際、大木 (2016) では時枝 (1976) が批判する「要素史的国語史研究」、すなわち、語彙、文法、音韻、文体の個別史的な研究をむしろ肯定的に捉え、しかし「「事実の羅列」という評言」（p. 22）を避けるために、その背後にある「歴史叙述」の方法を模索している。大木 (2016) は言語変化も政治史や社会史などと同じ「歴史」の一部とみなし、時間的に隔った2つ以上の出来事が「物語り（narrative）」によって組織化されるとする。その結果、言語の歴史にもダント (1989) の言う「物語説明の構造」が当てはまるとし、その例として係り結びの衰退過程に触れている。すなわち、(1) 平安時代に係り結びが盛んに使われ、(3) 鎌倉時代以降衰退が進む、という「被説明項」の関係を、(2) 平安末期に終止形と連体形が合流する、という「説明項」で結びつけることによって、「物語り」が組織化されるという。仮に (1) と (3) が（統計的に確証された）「観察」データだとすると、それらの説明になる (2) は「仮説」と言えそうである。しかし、大木 (2016) には「物語り」がどのように検証されるのか、ということについての議論はない。本発表で取り上げたいのは、この検証の問題である。

小柳 (2018) も大木 (2016) と同じく言語変化と歴史の記述を重ね合わせ、歴史は現在から過去を振り

返る「物語り文（narrative sentence）」によって語られるため、「＜ありのままの言語変化＞自体を捉えることはできず、唯一の＜真の言語の歴史＞にも届かない」（p. 5）とする。しかし一方で、言語変化を「自分の視角から好き勝手に記述し、思いのままに修正してもよい」（p. 7）わけではないとし、言語資料の「手がかり」から、他の「解釈」と矛盾しない、理にかなった、「価値のある解釈」を引き出さねばならない、としている（序章 3.2 節）。小柳 (2018) の「手がかり」を観察データ、「解釈」を仮説と考えると、以下で述べる本発表の立場に重なりそうだが、小柳 (2018) の「手がかり」には資料の年代も含まれ、「手がかり」と「解釈」の関係がどのようなものか明確に述べられていない。この関係が明確に述べられなければ、言語の文法や変化を推測することは、小説の一節を解釈する手続とさほど変わらないことになるが、はたしてそうなのだろうか。本発表では、仮説が観察データを演繹的に予測するものとしてこの関係を明確化する。

3　仮説検証法

1 節で述べたように、本発表では古典語の共時的研究も、言語変化を明らかにする通時的研究も、よって立つ方法論は現代日本語の文法研究と変わらないという立場に立つ。仮説を立てそれを検証することによって研究を進めるなら、歴史的研究が「事実を指摘しただけ」とはならないし、歴史研究に特異な「物語り」を想定する必要もない。ただし、仮説の立て方はともかく、仮説の検証方法については、内省に頼ることができない歴史的研究は現代日本語の研究に比べて極めて大きな制約を持つ。本節ではこの点について、上代日本語の副助詞ダニの共時的分析と、中古日本語への歴史変化（衣畑 2005、衣畑 2019、Kinuhata 2024）を例に議論する。副助詞ダニを取り上げるのは、観察と仮説の区別が直感的に理解しやすいためであり、それ以外の理由はない。仮説検証による文法史研究は幅広いテーマで実践されていると考えられるからである。

3.1　共時的研究

3.1.1　観察・観察的一般化・仮説

日本語の歴史的研究で積み上げて来た「実態」や文献資料に見いだされた「事実」とは何だろうか。小柳 (2018) が現代の我々には＜真の言語の歴史＞が手に入らないと言うように、文献の奥に潜む「真実」を指すとは考えられないだろう。個別的な文法形式の意味や変化が「実態」や「事実」として言及されている可能性はある。しかし、それらは適切な研究の文脈に置かれることによって、学術的な意味を持ちうると考えられる。一方、文献に観察されるデータそのものは、何らかの解釈が加わらない限り、言語研究としての価値を見出すのは難しい。

たとえば、副助詞ダニを例に取ると、**観察**データとは以下のようなものである[*1]

(3)　a. 万葉集に副助詞ダニの例は 91 例ある。
　　b. 万葉集の副助詞ダニは、30 例が否定文で使われる。
　　c. 万葉集の副助詞ダニは、39 例が広義の願望文で使われる。
　　d. 万葉集の副助詞ダニは、8 例が疑問文で使われる。
　　e. 万葉集の副助詞ダニは、11 例が条件節の中で使われる。
　　f. 万葉集の副助詞ダニは、3 例が上記以外の環境で使われる。

もちろん諸本や訓詁の問題はあるにしても、「万葉集」の本文を一つに決めてしまえば、(3) のような形で「事実」を取り出すことが可能だろう。また、「万葉集」が「上代語」をもっとも典型的に写し取った資料である、という前提を入れれば、(3) の観察から(4) のような一般化（**観察的一般化**）を導くことができる。

(4)　a. 上代語の副助詞ダニは、約 1/3 が否定文とともに使われる。
　　b. 上代語の副助詞ダニは、2/3 近くが願望文、疑問文、条件節で使われる。
　　c. 上代語の副助詞ダニは、上記以外の肯定文で使われることはほとんどない。

[*1] 以下、述語に何らかの否定形態素が現れる文を「否定文」、述語に広義の願望（「誂え」「意志」「仮想」「希望」「禁止」「命令」）を表す形態素が現れる文を「願望文」と仮に呼ぶ。これはダニの意味や変化を捉えるための便宜的な用語であり、そのような文タイプが古典語にあると主張しているわけではない。

(4) の観察的一般化は、統計的に(3) のデータから母集団を推定することで得られる。(3) から母集団の比率の 95% 信頼区間を推定すると、(4-a) が 23.5〜43.6%、(4-b) が 53〜73.6%、(4-c) が 0.7〜9.3% となり、それぞれに有意差があることがわかる[*2]。

しかし、(3) から(4) へは分布の当てはまる範囲を広げるだけで、なぜそのような分布になっているのかを説明しているわけではない。ダニの分布が、話者の持つ文法の結果だとすれば、「事実」として見られる分布をダニの意味から説明する必要がある。衣畑 (2019) および Kinuhata (2024) では、上代語のダニの意味(5-a) とダニが使われる語用論的条件(5-b) を立て、ダニが否定文や願望文に生起し、願望のない肯定文に生起しないことを説明している[*3]。

(5) a. ダニ上代の意味：実現可能性の高い命題を取る（それを前提として付け加える）
b. 語用論的条件：実現可能性が高いことがダニの現れる文の「主張を強化」する。
（主張の強化：ダニの現れる文 ⇒ 代替集合にある命題を用いた文）

このダニの意味と語用論的条件から、否定文(6-a) と願望文(6-b) に生起し、願望のない肯定文に生起しないことは、概略、以下のように説明できる。

(6) a. 夢にだに (夢尓谷) 見ざりし (不見在之) ものを〔夢でさえ逢えなかったのに〕おほほしく宮出もするか（万葉 175）
b. 夢にだに (夢尓谷) 見えむ (将所見) と〔夢でだけでも逢いたいと〕我はほどけども（万葉 772）

「夢で逢う」と「現実で逢う」を比べた場合、可能性が高いのは前者である。よって、(5-a) から、(6-a) も(6-b) もダニは「夢に見え（夢で逢う）」という命題を取っている。もし、否定も願望もない単純な肯定文ならば、「夢で逢う」ことは「現実で逢う」ことを含意（((5-b) の ⇒）しないので、(5-b) の語用論的条件からダニは認可されない。一方、(6-a) のように否定文で使われれば、より実現しやすい「夢で逢う」ことが叶わなければ、現実でも逢えないことが含意されるので、ダニは(5-b) を満たし認可される。また、話し手が恋人に逢えない状況で(6-b) を詠んだとしたら、より実現可能性の高い「夢で逢う」ことを望んでいるなら、より実現しにくい「現実で逢う」ことも望んでいることになる。よって、ダニは願望を表す述語においても認可される。

より形式的で、正確な説明は当該論文に当たられたいが、ここでの議論のポイントは、(5) のダニの意味と語用論的条件は、演繹的に (4) を導く**仮説**であるということである。このことを本発表では**仮説が現象を予測する**と言う。仮説が現象を予測するとは、現象を「説明」すると意味的に等価である。本発表の観点からは、観察的一般化によって得られれた現象を「説明する」とは、仮説を立ててその現象を正しく予測することにほかならない。

ここまで来ると、(3) から (4) への推論と、(4) から(5) に至る過程が異質であることがわかるだろう。前者は限られたサンプルの観察を一般化する帰納推論であり、サンプルを多く集めていけば母集団に限りなく近似していく。一方、(5) はいくらサンプルを集めても近似するものではなく、帰納とは異なる仮説形成（abduction）と言われるプロセスである（図 1）。

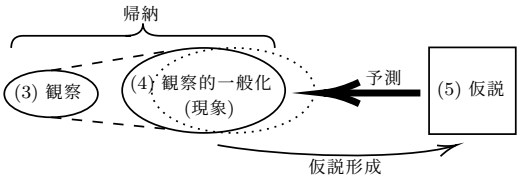

図 1　観察・観察的一般化・仮説の関係（概念図）

3.1.2　予測と検証

本発表では仮説から現象を演繹的に導くことを**予測**（prediction）と呼ぶが、これは現象が既に知られているかいないかを問わない。日常語の「予測」はふつう未知の出来事を言い当てるため、ここでの使い方は日常語とは異なる。ただし、立てた仮説がまだ知られていない現象を予測する（してしまう）こともある。

---

*2 R Core Team (2025) の `binom.test` 関数を使って Clopper-Pearson 区間を求めた。

*3 ダニの意味 (5-a) は衣畑 (2019) と Kinuhata (2024) で変わらないが、語用論的条件の書き方が若干異なる。(5-b) は後者に従った書き方にしている。

前節で立てた仮説 (5) は、否定極性表現と言われる英語の *any* の意味（Kadmon and Landman 1993 による仮説）と並行的である（表 1 参照。詳しくは衣畑 2019: 4.2 節、Kinuhata 2024: 2.3 節）。よって、仮説 (5) は、ダニが *any* と同じく否定極性表現が認可される下方含意文脈（downward entailing context: Ladusaw 1979）で認可されることを予測する。

表 1　*any* とダニの比較

	any	ダニ
意味	名詞句の指示領域を広げる	実現可能性の高い命題を取る
条件	主張の強化 (strengthening)	主張の強化

下方含意文脈としては条件節(7-a)、全称量化詞の制限節(7-b)、後続事態を表す時間節(7-c)、比較の対象となる節(7-d) 等が知られている（用例は澤田他 2019: p. 3, 12）。

(7) a. [If Mary sees **anyone**], she will cry.
　　b. Every student [who likes **any** flower] goes to the flower shop.
　　c. [Before going **any** further], let us discuss this problem.
　　d. I would walk rather than [wait for **any** bus].

しかし、このうちダニの生起が確認できるのは条件節(8) のみであり、ほかの例は確認できていない。

(8) [朝霞鹿火屋が下に鳴くかはづ　声だに聞か] ば（声谷聞者）〔声だけでも聞けたら〕我恋ひめやも（万葉 2265）

表 2 にまとめたように、仮説がダニの生起を予測する文脈のうち、「否定文」「条件文」ではダニの例が確認できるが、「全称制限節」「後続時間節」「比較節」では確認できない。前者のように現象が予測どおりの場合、予測が**確証される**と言い、後者のように予測と異なる場合、予測が**確証されない**と言う。

表 2　下方含意文脈

	any	ダニの例
否定文	認可	あり
条件節	認可	あり
全称制限節	認可	なし
後続時間節	認可	なし
比較節	認可	なし

ただし、確証される、確証されないの意味合いは、予測のタイプによって異なる。表 2 は仮説 (5) がダニの生起を予測する、よって、用例が「ある」と予測する文脈である。一方、願望のない肯定文のように、ダニが生起しない、よって、用例が「ない」と予測する文脈もある。この予測の違いと、それぞれの予測に対する実例による確証／非確証の関係は図 2 のようにまとめられる。

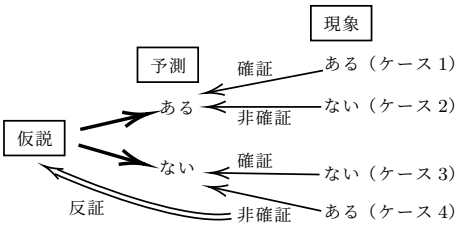

図 2　予測の確証／非確証と仮説の反証
（「ある」「ない」は用例があるかないか）

まず、仮説が用例の存在を予測する場合、実際に用例が見られるケース 1 では、ひとまず素直に予測は確証されたと考えてよいだろう。一方、用例が見られないケース 2 には、たまたまその文献で用例がない可能性も考慮する必要がある。たとえば、用例が「ある」と予測する全称量化詞の制限節は、上代語だと「[かはづの声を聞く] ものみな、恋ひめやも」のようになると思われるが、管見の限り、上代語で、全称量化詞ミナが制限節を取る例自体が確認できない。とすると、この場合の「確証されない」は、未だその例が確認できていない、といった程度の意味にすぎない場合もある。もちろん、生起すると予測されるパタンがその時代のその資料に不自然でない場合には、仮説に何らかの制約を加えるような修正が必要になるだろう。しかし、内省にもとづく文法判断ができない文献調査では、用例の不在を証明することがむずかしく、用例がないことがただちに仮説の棄却を意味するわけではないことは注意しておきたい。

次に、予測が用例の不在を予測する場合について考えてみよう。ケース 3 は、実際に用例が確認されず、予測が確証される場合である。ただし、上記のように、文献調査における用例の不在は証明しにくく、たまたま確証されている可能性ももちろん排除できない。しかし、注意したいのは、予測が確証されたとしても、仮説自体が「確証」されることはない、ということである。仮説はあくまで仮説であり、予測を演繹的に導くに過ぎない。予測が当たれば当たるほど、仮説の確からしさは増していくが、演繹の結論が前提を真にするわけではない[*4]。このことが意味するのは、たとえ用例の不在が証明されたと

[*4] たとえば「あらゆる生命体は死ぬ」という仮説の持つ予測は個々に見られる人の死やペットの死によって確証され、仮説は確らし

しても、仮説が正しかったということにはならないということである。よって、大切なのは、用例の不在の証明ではなく、「あってもよいはずの用例がない」（たとえば肯定平叙文の用例はたくさんあるのに、ダニの例にはない）ことによって、仮説の確らしさが増すことである。

「あってもよいはずの用例がない」ということは、ケース 4 とセットで重要な意味を持つ。用例が「ない」ことを予測している場合、「あってもよいはずの用例がない」ことは仮説の確らしさを増す一方、用例が「ある」ことはそのまま仮説の**反証**（falsify）に繋がるからである。特に文献調査では用例の不在が証明しにくいため、用例が「ある」ことによる仮説の反証はより一層重要になる。用例が「ない」ことと違い、用例が「ある」ことは文献調査の範囲を広げても変わらないからである。

以上をまとめると以下のようになる。仮説はその性質上、真にはなりえない。ただし、仮説の持つ予測を現象によって確証することで、その蓋然性を高めることができる。一方、仮説は予測が確証されないことによって、反証されうる。文献調査では、用例の不在を証明することが難しいため、用例の存在によって予測が間違っていることを示せるように、仮説の**反証可能性**（falsifiablity）を担保することが重要になる。このように仮説は予測を通して現象によって検証できるように立てなければならない。

3.1.3　仮説の棄却と保持

前節では「ない」と予測する用例が「ある」ことによって仮説が反証されると述べた。では、このような反例が 1 例でもあれば仮説は棄却されなければいけないのだろうか。しかし実際には、そのように仮説を即座に棄却するということはあまりないものと思われる。たとえば仮説 (5) のもとでは、ダニは肯定の平叙文では使えないことを予測する。しかし、実際は (3-f) のように、肯定の平叙文で使われることもある。(9) はその 1 例である。

(9)　風をだに（風乎太尓）恋ふるはともし〔風だけでも恋しく思えるのは羨ましい〕　（万葉 489）

衣畑 (2019) 等ではこの例を「ともし（羨ましい）」という形容詞の意味から「風を恋いたい」という願望の意味を読み取ることができるとして、(3-c) の諸例と同様に処理し、仮説を保持している。

実際に例外をどのように処理するかはさまざまであり、一律に論じることは難しい。そこでここでは、仮説の棄却・保持を、文献の調査範囲との関係に絞って議論したい。

まず、ケース 1 とケース 2 は用例が「ある」ことを予測する場合である。ケース 1 ではすでに用例の存在によって予測が確証されているので、調査範囲を広げても変わりはない（わざわざ狭めることも考えにくい）。しかし、ケース 2 では予測が確証されていないので、調査範囲を広げることにより、予測を確証する用例が見つかるかもしれない。適切な資料がある場合には、追加調査をしてもよい事例になると言えよう。

次に、ケース 3 とケース 4 は用例が「ない」ことを予測する場合である。ケース 3 は用例が「ない」ことによって予測を確証しているが、調査範囲を広げることによって、反証されにくい仮説であることを示すことができる。ケース 4 では既に仮説が反証されていれば、調査範囲を拡大しても反証されている状態は変わらない。一方で、調査範囲を縮小することによって、仮説を保持できる可能性はある。たとえば、例外と思われていた例が全て東国方言の例であり、奈良方言に関しては仮説が当てはまるかもしれない。

3.2　通時的研究

3.2.1　観察・観察的一般化・仮説

平安時代（中古）に入り、ダニは(10) のように願望の意味がない肯定文でも使われるようになった。

(10) はかなき御くだものをだに、いとものうくしたまひて〔ちょっとした食べ物さえいやがりなさって〕（源氏・若菜）

(10) のダニが付いている命題「（紫の上が）ちょっとした食べ物をいやがる」は、文脈から対比される命題「普通の食事をいやがる」「豪勢な食事をいやがる」と比べて実現可能性が低い。よってダニの意味は、中古に入って以下のように変化し（つつあっ）たと考えられる。

(11) ダニ中古の意味：実現可能性の低い命題を取る（それを前提として付け加える）

さを増すが、これら個々の事例が仮説を真とするわけではない。宇宙にはまだ見ぬ生命体が存在する可能性がある。

ダニの意味自体を我々は観察できないため、ダニの意味が (5-a) から(11) に変わったというのは仮説である。(11) の意味も、ダニの生起する命題や文脈を考慮して仮定していることに注意されたい。なお、(5-b) の語用論的条件に変化はない。「ちょっとした食べ物を嫌がる」が「普通の食事を嫌がる」「豪勢な食事をいやがる」を含意（⇒）し「主張を強化」しているため、願望のない肯定文でも認可されている。

また、衣畑 (2005) では、ダニの変化はダニの句と否定のスコープが(12-a) から(12-b) のように再解釈されたことで起こったと考えた。

(12) a. 上代のダニ：[[夢にだに見え] ず] （否定 > ダニ句：ダニが「(妻が) 夢に見え」を取る）
b. 中古のダニ：[夢にだに [見えず]] （ダニ句 > 否定：ダニが「(妻が) 夢に見えず」を取る）

この変化の過程も当然仮説である。変化について仮説をまとめると(13) のようになる。

(13) a. ダニの意味変化：実現可能性の高い命題を取る > 実現可能性の低い命題を取る
b. 意味変化の過程：ダニ句と否定のスコープの再解釈

(13) の変化についての仮説はどのようなことを予想するだろうか。まず、上で見たように、ダニが願望のない肯定文で使われるようになることを予測する。その結果、相対的に、願望で使われる割合が減ることも予測される。これに対して、否定文の変化を予測するのは簡単ではない。そこで、(13-b) の対立仮説を考えてみよう。(13-b) の仮説が否定文での変化を想定するので、対立仮説は願望文からの変化を想定する。この仮説では否定文が減ることはあっても増えることは予測できないだろう。そこで、仮説 (13-b) には、用例が「増える」という予測ができるように（「増える」ことを説明できるように)、否定文が肯定文で使われるダニへの供給源になるという補助仮説を加える。

以上の予測を表 3 にまとめ、上代から中古の散文の粗品度（観察）を表 4 に[*5]、95% 信頼区間を付した母集団における比率（観察的一般化）を図 3 に示す。

表 3　変化の予測

	移行期	収束期
願望文	減る	減る
否定文	増える	?
肯定文	増える	増える

表 4　文脈ごとの粗品度

	上代	中古前	中古中
願望文	58	23	221
否定文	30	27	233
肯定文	3	7	229
合計	91	57	683

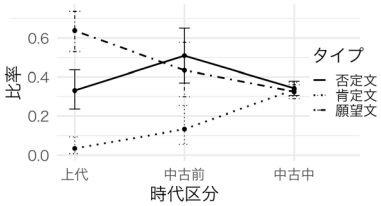

図 3　現れる文脈の比率

(13-a) の変化は肯定文でダニが生起する割合が増えることで確証される。(13-b) の変化は上代から中古前期にかけて、否定文でのダニ生起が増えることによって（対立仮説を破棄し）確証される[*6]。

3.2.2　予測と検証

共時的研究における仮説が用例の「ある」「ない」を予測するのに対し、変化についての仮説は用例が「増える」「減る」を予測する（図 4[*7]）。たとえば a>b という変化を仮定すると、a であることを表す特徴 a', a'', a''', ... が失われ、b であることを表す特徴 b', b'', b''', ... が現れることを意味する。具体的には、a>b を (13-a) のようなダニの意味変化とすると、特徴 a' はダニが願望文に現れること、特徴 b' は願望のない肯定文に現れることのようになる。

ただし、一つの文法的性質が用例の「ある」「ない」を予測するのと異なり、変化の予測する「増える」「減る」は基本的に異なるプロセスである。すなわち、「増える」は b という性質（形態・統語・意味のいずれにしろ）が現れることの結果であり、「減る」というのは a という性質が失われることの結果である。図 5 の a が失われ b が現れれば、同時に特徴 a' が減り特徴 b' が増えることもあるが、片方だけ

*5 中古前期、中古中期の資料および集計は衣畑 (2005) による。

*6 ただし、どの程度増えれば確証されるのかという問題は残る。ここでは、上代で願望文と否定文の生起に有意差があったのに対し、中古前期で有意差がなくなっていることを持って増えたとみなしておく。

*7 「増える」や「減る」は確率を含む命題（確率命題）と考えることができる。たとえば上代から中古へのダニの変化では、願望のない肯定文に生起する確率が高くなる、と言える。ただし、この確率は仮説にも含まれる（b への変化でその特徴が増える）ため、仮説から予測が演繹される。

が起こることもある。たとえば、a という意味を保持したまま b という意味が現れれば、その形式が多義的になる。このことが意味するのは、b への変化が起こったかどうかというのは、基本的に b が予測する特徴 $b', b'', b''', \ldots$ によってしか確証できないということである[*8]。

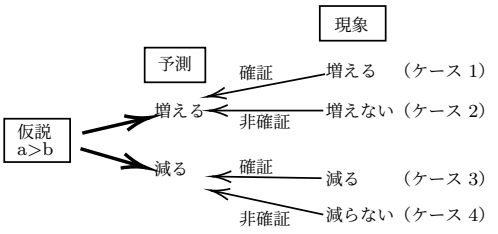

図 4　変化の予測の確証／非確証（「増える」は b の特徴を表す例、「減る」は a の特徴を表す例）

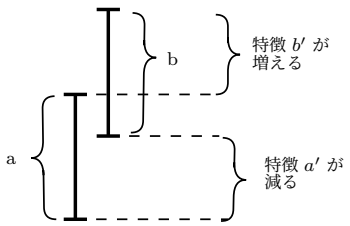

図 5　a>b への交替

一般的に、ある性質の出現は、メタファー、メトニミー、再分析、文法化等々によって説明されるのに対し、ある性質の消失は偶然性の関与が高いため、ここでは図 4 のケース 1、ケース 2 のみについて言及する。ケース 1 は仮説が b の特徴 $b', b'', b''', \ldots$ を示す用例が「増える」ことを予測し、実際増える場合である。この場合は予測が現象によって確証されると言える。もちろん 3.1.2 節で論じたように仮説自体が「確証」されることはないが[*9]、仮説の確らしさは高まる。ケース 2 は実際に用例が増えず、予測が確証されない場合である。b の特徴 $b', b'', b''', \ldots$ が一つも見られなければ、a>b へと変化したという根拠を失うだろう[*10]。一方、b', b'' はの増加は見られるものの、b''' の増加は見られないといった場合は、b''' が見られない理由を文献の性質や b の意味的制約から説明することで、仮説は保持される。

3.2.3　仮説選択

仮説は事実と異なり、その性格上一つに定まっているわけではない。複数の仮説が現象によって検証され、より妥当な仮説が選択されることにより、我々の知識が深まる。これは歴史変化の仮説についても同様である。複数の変化過程が対立する事例として、変化の順序や変化の経路についての仮説が考えられる。

変化の順序はたとえば a から d への変化の途中段階が b>c か c>b かが問題になる場合である。b が先か c が先かは、どちらの特徴が先に現れるかで予測が変わる。変化の経路は、a から d への変化について、b を経由するか、c を経由するかである。ダニの例において、願望のない肯定文への変化が、否定文から起こったのか、願望文から起こったのかも経路の問題と考えることができる。

どちらの場合も、仮説が少数に限られていれば、他方を棄却することで一方を採択することができる。たとえば b を示す特徴 b' の増加は b を経由して起こったならば「b が d への供給源となった」という補助仮説とともに予測することができる。しかし、c の経由を支持する仮説では「c が d への供給源となった」という補助仮説を補っても b' の増加は予測できない。よって c を経由したという仮説を破棄し、b を経由したという仮説を（暫定的に）採用することになる。

仮説の選択は、問題となる仮説が少数であれば、共時的研究にも有効である。たとえば仮説 A と仮説 B が問題になるとき、この 2 つの仮説の予測が異なる現象によって、より妥当な仮説を選択することができる。仮説 A は否定文での生起を予測するが、仮説 B では生起しないと予測する場合、もし当該の形式が否定文に生起していれば仮説 B を棄却することができる（3.1.2 節）。つまり、仮説の選択には、対立仮説が「ない」ことを予測するのが重要である。歴史変化の場合、a>b への変化が b' が「増える」ことを予測するならば、対立仮説 a>c は b' が「増えない」ことを予測し、b' の増加によって反証される。

---

*8 前節では (13-a) の変化によって、願望文に現れるダニが「減る」としたが、それは否定文が増えることによって、ダニの用例の中の比率が減るということであり、新しい意味の発生の直接的な帰結ではない。

*9 確率論的には、「増える」というケースが何度も確認される場合、「増える」という仮説の確率（事後確率）が高まり、一定の基準で仮説を選択することができる。しかし、日本語の歴史的研究の場合、何度も実験を繰り返すということが難しい。

*10 共時的研究についても用例が「ある」と予測される特徴 $a', a'', a''', \ldots$ の全てで用例が見られなければ、性質 a を仮定する根拠は乏しいと言える。

4　なぜ仮説検証法なのか？

2 節冒頭で見たように、日本語の歴史的研究には、1) 事実を指摘しただけであり、2) 理論的反省なく日本語史における位置づけがなされていない、という批判的反省が加えられてきた。しかし、これまで見てきたように、仮説は事実ではない。たしかに「文献資料に見いだされた事実」（＝観察）の指摘では研究の位置づけが難しいが、仮説であれば、それを日本語の歴史や一般言語学的研究の中に位置付けることができる。たとえば、ダニが上代語で否定文・願望文等に現れるという指摘は個別の事例に言及しただけであり、「ダニ」という形式を持たない諸言語と比べることはできない。しかし、ダニを否定極性表現と位置付けることにより、否定極性表現の類型の中で、ダニの特徴を議論することができる。また、ダニが肯定文に生起するようになったという事実は「ダニ」がない言語にとって有益な情報ではないが、スコープの再解釈により否定極性が失われる変化は、他の言語にも起こりうるだろう。このように観察を仮説に昇華することで、一般言語学的な文法研究や変化の研究へ貢献しうる。

にもかかわらず、事実（＝観察）は歴史的研究にとって極めて重要である。仮説は観察を予測（説明）するために立てられ、観察によってしか検証されないからである。しかし、観察によって仮説の検証を繰り返しても、仮説は真にはなりえない。我々が世界についてより知ることができるのは、無数にある仮説のうち、どれが誤っているかを知ることができるためである。よって、仮説は反証可能な形で書かれなければならない。たとえば「閉じられた社会から、さらに開かれた社会へと、コミュニケーションの場が拡大する」ことが「係り結びの衰退」を予測（説明）していると言えるだろうか。もし、歴史の事実とは反対に、係り結びが後世に発達していれば、「コミュニケーションの場が拡大」したことが係り結びを発達させたとも言いうるのではないか。「仮説」が目的論になり観察からあまりにかけ離れてしまうと、反証可能性を担保できなくなり、我々の世界に対する理解を深めることができなくなる。つまり、仮説は観察を離れては生きられないのである。

5　文法史研究は何がどう進化しているのか

仮説検証法の適用は文法史研究の「進化」と言えるのだろうか。学会誌に載る水準の論文であれば、大抵は、特定の事実に着目し、観察データを集めて一般化し、その要因を説明する、という構造を持っているのではないだろうか。だとすると、本発表は、研究のありうべき方向性を示したというより、研究の実情を表現したにすぎない。学会誌に採用される水準にない論文の中には、「事実を指摘しただけで」「「実態」の研究を積み上げ」ただけの論文もあるかもしれない。しかし、「事実を指摘」した背景に何らかの視点があるとすれば、仮説形成まではそう遠くないとも考えられる。だとすれば、「事実」（＝観察）を離れない限り、文法史研究はおおむね健全性を保ってきたと言える。一方、日本語の歴史についての大胆な仮説は反証しえないものならば、いかなる進歩ももたらさない危険性がある。常に我々は、自身の立てる仮説が観察データと相対しているかどうか、心に留める必要がある。

参考文献

Kadmon, Nirit and Fred Landman (1993) “*Any*,” *Linguistics and Philosophy*, Vol. 16, pp. 353–422.

Kinuhata, Tomohide (2024) “Scope ambiguity and the loss of NPI feature: Evidence from the history of *dani* in Japanese,” in Kishimoto, Hideki, Osamu Sawada, and Ikumi Imani eds. *Polarity-sensitive expressions: Comparisons between Japanese and other languages*, Berlin: De Gruyter Mouton.

Ladusaw, William (1979) “Polarity sensitivity as inherent scope relations,” Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

R Core Team (2025) *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, URL: `https://www.R-project.org/`.

大木一夫 (2016)「言語史叙述の構造」,『日本語史叙述の方法』, 1–25 頁, ひつじ書房.

衣畑智秀 (2005)「副助詞ダニの意味と構造とその変化—上代・中古における—」,『日本語文法』, 第 5 巻, 第 1 号, 158–175 頁.

——— (2019)「上代日本語の否定極性表現—副助詞ダニの意味再考—」, 澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編）『極性表現の構造・意味・機能』, 第 14 章, 356–379 頁, 開拓社.

小松英雄 (1999)『日本語はなぜ変化するか—母語としての日本語の歴史』, 笠間書院, 東京.

小柳智一 (2018)『文法変化の研究』, くろしお出版, 東京.

阪倉篤義 (1975)『文章と表現』, 角川書店.

澤田治・岸本秀樹・今仁生美 (2019)「第 1 章 序論—極性表現の構造・意味・機能」, 澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編）『極性表現の構造・意味・機能』, 1–47 頁, 開拓社, 東京.

時枝誠記 (1976)『言語生活論』, 岩波書店, 東京.

山口佳紀 (2011)『古代日本語史論究』, 風間書.

ダント・アーサー C. (1989)『物語としての歴史–歴史の分析哲学』, 国文社, 東京.